

皮膚科のトリビア

223

浅井 俊弥(浅井皮膚科クリニック)

<http://www.asai-hihuka.com/trivia.html>

トリビア(trivia)=3を意味するtriと+道を意味するviaでもとは三叉路の意。古代ローマで三叉路が多かったことから「どこにでもある場所」、そこから転じて「瑣末なこと」となり、今では雑学的知識、豆知識、などを意味する言葉として定着している。

本欄は、小誌・浅井編集委員が学会・研究会などで見聞きした「皮膚科のトリビア」をその都度まとめ、連載しています。ご意見等ございましたら、ぜひ小誌「声」欄までお寄せください。

●某製薬会社主催Web講演会から

令和4年10月8日

英国における酒皰の治療方針

毛細血管拡張型：ブリモニジン外用、さらに持続的な赤みに対してはパルス色素レーザー、Nd：YAGレーザー、高強度パルス光、一過性の赤みに対してはプロプラノロール内服。

丘疹膿疱型：イベルメクチン外用、メトロニダゾール外用、アゼライン酸外用、重症例では抗菌薬内服。次の段階としてミノサイクリンフォームの外用、さらに重症例では低用量のイソトレチノイン内服。

一言コメント

「一般的な指導として、既知の悪化因子を避けること。石鹸などによる刺激を避け、エモリエント剤(油脂などの油性成分)で洗い、保湿を日常的に行うこと。日焼け止めを使用することがあげられている。イベルメクチンは毛包虫をターゲットとして行われる治療と思われる。」

●日本皮膚科学会第903回東京地方会から

令和4年10月15日

ベバシズマブ(アバスチン®)による皮膚潰瘍

ベバシズマブは抗vascular endothelial growth factor (VEGF) モノクローナル抗体で、血管新生を遮断することで切除不能な固形癌の増殖を抑制する

作用があり、ほかの抗悪性腫瘍薬と併せて用いられる。肝細胞癌の80歳代男性患者に投与したところ、両足背に潰瘍が生じ、拡大した。ベバシズマブによる創傷治癒遅延が関与した可能性を考え、中止したのちに植皮にて治療を行った。病理組織像では、血管内皮細胞の腫大が認められた。これまでの報告例は、乳癌などの術創3例、乳癌の転移部2例、結腸癌のストーマ周囲2例、下腿・足背5例である。

一言コメント

「チロシンキナーゼ阻害薬であるソラフェニブ、スニチニブもVEGF阻害作用があり、手足症候群のほかにもうっ滞性皮膚炎の増悪などの脈管系皮膚疾患に関する副作用があるとのこと。」

●日本皮膚科学会第903回東京地方会から

令和4年10月15日

原発性皮膚びまん性大細胞型B細胞リンパ腫、下肢型の特徴

50歳代男性の腹部に生じた、primary cutaneous diffuse large B-cell lymphoma, leg type (PCDLBCL, LT)の症例。通常は高齢女性の下肢に好発、単発ないし多発する紅色～紫紅色の結節、腫瘍で急速に拡大。下肢以外に生じた場合も下肢型と診断する。

異形細胞は胚中心細胞様の大型リンパ球で、免疫染色ではCD79a(+), CD20(+), CD5(-), Bcl-2(+), Bcl-6(+), MUM-1(+), CD10(+/-)。

一言コメント

「数年経つと変わるほど、リンパ腫の分類はむずかしい。ただしT細胞かB細胞かと、悪性度が低いのか高いのかは知っておく必要があると思っている。」

●第14回みなと認知症セミナーから

令和4年10月24日

リストバンドセンサーを用いた認知症予防

リストバンドセンサーを装着して、歩数、会話時間、心拍数、睡眠時間、中途覚醒時間などの日常生活習慣をチェックし、併せて認知症スクリーニングテスト(MMSE)を行い、認知症予防に関連する項目を確認した臨床研究の結果報告。歩数は7,791歩以上、会話時間は80分から321分、睡眠時間353分から434分がMMSEの点数が高かった。睡眠時間が長すぎると運動量が減ることもあり、認知症のリスク因子となる。アミロイドβは覚醒中に産生され、睡眠中に排泄される。適度な運動とともに睡眠の質を高めることが認知症の予防になる。

一言コメント

「皮膚科では痒みのために夜間不眠の患者がいる。これも認知症のリスク因子になるかもしれないと思った。リストバンドセンサーは生活習慣に関連する疾患の管理に科をまたいで使えそうである。ただし会話時間は自分の声だけでなく、テレビの音も含まれてしまうらしい。」

●第86回日本皮膚科学会東京支部学術大会から

令和4年11月19日

バンコマイシン(VCM)による線状IgA水疱性皮膚症

VCMは線状IgA水疱性皮膚症(linear IgA bullous dermatosis: LABD)を誘発することがあるが、従来のLABDとは異なり、蛍光抗体間接法が陰性である。ただし血清とVCMの両方を加えることで、基底膜領域に線状のIgA沈着が生じることが確認された。1 mol/L NaCl sprit skinでは真皮側に陽性で、イムノブロットではVII型コラーゲンのNC1ドメインと反応した。ELISAでは、VCM誘発

性LABDの血清14検体のうち、VCM添加なしでNC1ドメインと反応したのは4検体のみ、添加後に反応したのが10検体だった。VCMはVII型コラーゲンに対するIgA自己反応性を媒介していることが示された。

一言コメント

「血清と薬剤を加えることで、間接法が陽性になることを利用して、薬剤誘発性水疱症の原因薬剤の同定にも使えるということ。シンプルだが重要な視点だと思った。」

●第86回日本皮膚科学会東京支部学術大会から

令和4年11月20日

内服ステロイドが効かないときには併用薬を考慮する必要がある

水疱性類天疱瘡の60歳代の女性患者。抗BP180抗体が5,000、抗BP230抗体も150以上。プレドニゾロン(PSL)40 mgを投与したが紅斑、水疱は拡大し、抗BP180抗体も10,000まで増加した。既往にてんかんがあり、フェノバルビタール、フェニトイン、バルプロ酸、ゾニサミドを内服中。ベタメタゾン4 mgに変更後も増悪が続いた。フェノバルビタール、フェニトインを段階的に中止したところ、症状は改善し、抗BP180抗体も800まで低下した。抗てんかん薬はCYP3A4を強く誘導することが知られていて、CYP3A4がステロイドの代謝を亢進させ、ステロイドの薬効を低下させる。内服ステロイドが思ったほど効かないときは、併用薬の把握が必要である。

一言コメント

「非常に重要な報告だった。同じような症例にこれまでに遭遇していたかもしれないと思った。CYP3A4の代謝を受けると、プレドニゾロンの効果は1/2に、デキサメタゾンとベタメタゾンの効果は1/5になってしまうとのこと。CYP3A4を強く誘導する薬剤には、抗てんかん薬(フェノバルビタール、フェニトイン、カルバマゼピン)のほか、リファンピシン、ボセンタン、ジオグリタゾン、抗HIV薬がある。ステロイド外用薬の効果がこれらの薬剤内服中に減弱することがあるのかも、少し気になった。」